

本年度における肝炎ウイルスフォローアップに向けての取り組み

研究分担者：石上 雅敏 名古屋大学医学部附属病院 消化器内科

研究要旨：今年度本研究班全体として院内でのウイルス陽性者 follow up 対策として新たに施設内での HBV-ASC、HCV-SVR follow up 率の調査が新たに加わった。分担研究員として、2012 年 1 月から 2014 年 12 月までに当院初診となった HBV-ASC のフォローアップの現状につき調査したので結果について報告する。

A. 研究目的

今年度は研究班として (1) 協会けんぽ、組合けんぽでのウイルス検診促進、(2) 職域肝炎ウイルス陽性者の推定、(3) 自治体のウイルス検診・follow up 実態調査、(4) 施設内での HBV-ASC、HCV-SVR follow up 率、(5) 院内非専門医陽性者の follow up 率、(6) 新規リーフレットと効果検証、(7) 簡単な診療情報提供書の水平展開、(8) 特定非専門科へのアンケート調査、(9) 肝がん症例への両立支援ツールの 9 つの目標設定をおこなっている。このうち独自の調査として、今年度は新たに HBV-ASC の follow up 率調査に協力したので、当院での結果を記載してみる。

B. 研究方法

院内における follow up の取り組みとして、的野研究員を中心とした HCV-SVR、HBV-ASC の follow up 状況把握のうち、HBV-ASC の follow up 状況につき、2012 年から 2014 年までに当院肝臓外来に受診した患者 4120 名のうち、HBV 陽性の初診患者 199 名をピックアップし、検討を行った。

C. 研究結果

今回指定のあった 2012 年 1 月 1 日から 2014 年 12 月 31 日までの間に 4120 名の患者が肝臓外来を受診、うち 199 名が HBV 陽性の初診患者であった。うち、担癌患者、すでに核酸アナログ等の治療が開始されている患者を除く

と 122 名が対象となった。

3 年後の follow up 率としては全体で 47.24%、対象症例では 48.0% と半数以下であった。また、Kaplan-Maier 法で時間軸も含めて検討すると、全体；1 年：79.8%、3 年：69.6%、5 年：65.5%、対象症例；1 年：72.0%、3 年：61.1%、5 年：56.4% であった。

全体のデータについては的野研究員のデータを御参照いただきたい。

D. 考察

本検討においては、拠点病院である我々の施設においても 3 年後の follow up が半分弱となかなか follow up の継続が難しい群であることが浮き彫りになった。反面時間軸とともに検討してみると、Drop out が多いのが初期の 1、2 年であり、特に ASC 症例においては「肝機能も正常、症状もないのになぜ受診が必要？」を最初の時点でよく説明をすることが大事なのかもしれないという印象を持った。「肝炎が治った」と説明される HCV-SVR 症例も含めて受診、受療継続のため、「たたけ」「ひとつ」などの勸奨資材をこれらの群にも活用するのモ一考という印象を持った。

E. 結論

今年度 HBV-ASC の follow up 率の検討に関わった。HBV-ASC は基本的には無症状の患者が多く、受療の継続に対しての動機付けが難しい群ではあるが、今回の当院での検

討から最初 1、2 年の受診が継続できれば引き続き受診を継続する患者が多いことも明らかとなり、特に初診時における動機付けが大切であることが改めて認識された。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 発表論文

なし

2. 学会発表

なし

3. その他

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし